

比較日本学教育研究センター研究年報 第11号 目次

《巻頭言》

古瀬 奈津子	4
--------	---

《第16回国際日本学シンポジウム 日本学からの対話—認識と言説のはざま—》

セッションⅠ 19世紀の東アジアと日本—何がどう変わったのか—

荒野 泰典	近世の国際関係と「鎖国・開国」言説 —19世紀のアジアと日本、何がどう変わったのか—	6
小風 秀雅	アヘン戦争とペリー来航—19世紀における転換の起点—	18
古結 諒子	華夷秩序と帝国主義	23
季武 嘉也	20世紀における旧秩序と新秩序	28
パネルディスカッション（セッションⅠ）		33
小風 秀雅	総括	44

セッションⅡ 越境する文学の諸相 ～ことばを越える・ジャンルを越える～

田 原	本当のバイリンガル	46
高橋 睦郎	沈黙に学ぶ	50
谷口 幸代	多和田葉子の文学における境界 —「夕陽の昇るとき～STILL FUKUSHIMA～」を中心に—	55
郭 南燕	外国人の日本語文学—国際語への歩み—	65
稲賀 繁美	翻訳と憑依あるいは翻訳の骨折と骨折の翻訳	74
パネルディスカッション（セッションⅡ）		86
谷口 幸代	総括	95

《第9回国際日本学コンソーシアム グローバル化と日本学》

◆日本文化部会Ⅰ

世川 祐多	近世武家社会の養子から考える女性史	98
鄧 宜欣	元禄享保期の経世思想	104
和田 麻子	18世紀中期における御用木伐出と地域社会 —武蔵国秩父郡大滝を事例に—	110
クレメン・セニツァ	大日本帝国をめぐる西欧の学者による表象についての考察	117
寺内 由佳	概要	122

パネルディスカッション

山田 順子	日露戦争と女性の国民化—小栗風葉『青春』の世界—	124
加藤 恭子	女子教員の中国派遣に関する報道の構築性 —河原操子を一例として—	128

菊地 優美	田村俊子『海坊主』論—「熱帯の殖民地」から帰還する〈母〉と〈帝国〉	131
村山 佳寿子	近代社会における女性の音楽教育について —伝統音楽の中の稽古事を通して—	137
芳賀 祥子	日露戦争イメージの再生産—女性雑誌を中心に—	143
古結 諒子	「日清・日露」という見方について	148
小風 秀雅	概要「物語る作法」—文学と歴史の対話—	151
◆日本文化部会Ⅱ		
石田 恵理	グローバリゼーションと日本独自の哲学研究の意義—大森荘蔵の事例から—	155
ライヒ・ダヴィド	文化的テラスのシンボリズム	162
潘 蕾	中国狐文化の受容から見る日本人の女性観	166
清水 真裕	概要	174
◆日本文学部会		
ヴィート・ウルマン	五山文学に見られるグローバル化の始まり	177
浅井 美峰	肖柏と池田氏—連歌師と千句連歌主催者の関係について—	181
王 凱洵	『ねじまき鳥クロニクル』における自我形成をめぐる —メディアムの存在に視点を—	187
マルティン・ティララ	平安初期物語に見える恋愛のグローバル化	193
范 淑文	日本近代文学作品に語られる作家の異国体験—藤村・漱石の場合—	197
ダニエル・ストリュープ	グローバル化と日本文学の研究 —ミハイル・バフチンの小説論と西鶴を中心に—	205
朴 英美	概要	211
◆日本語・日本語教育学部会		
譙 燕	グローバル化時代における日中語彙交流 —中国語に見られる日本語由来の新語を中心に—	213
施 建軍	中日韓三カ国言語の漢字源語—比較研究の現状と課題—	218
金 榮敏	韓国における日本語学・日本語教育の現状と展望	223
江 宛軒	存在様態のシテイルについて—格体制の変更から—	229
劉 賢	中国大学日本語専攻用の教科書における使役表現の扱いについて —学習者の産出例との関連をめぐる—	235
チョン・ミリョン	判断のモダリティ表現について—「と見える」を中心に—	241
曹 ナレ	日本語教育に役立つ多義記述のための—考察—テクルを例に—	246
石井 久美子	大正時代の外来語—固有名詞混種語を中心として—	251
鄭 在喜・河野 礼実	概要	257

◆全体会

アンドレイ・ベケシュ グローバリズムと国際日本学—小国の視点から—…………… 260

《研究論文》

森上 優子 新渡戸稲造の社会教育
—雑誌『実業之日本』の修養言説を手がかりとして—…………… 265

《センター活動報告》

センター活動報告…………… 274
研究プロジェクト活動報告…………… 277
センター規則…………… 284
投稿規程…………… 286
第17回国際日本学シンポジウムのお知らせ…………… 288
バックナンバーのご案内…………… 289
編集委員より…………… 290